

柳井医療センター だより

第 3 号

〈発行所〉
国立病院機構
柳井医療センター
〈発行責任者〉
住元 了



はじめに 院長 住元 了

医師会の先生方におかれましては、常日頃より当院病院運営におきまして御協力賜り厚く御礼申し上げます。さて、皆様方、唐突ですが最近異常と思われる事が多くありませんか？まず最近の気候です。8月には珍しい2つの大型台風の到来。それに引き続く前線の停滞。全国随所で発生する記録的ゲリラ豪雨の数々。各地に甚大な被害を与えています。8月下旬には私の地元である広島市でも多発的土石流の発生により70余名の尊い命が失われました。

異常なのは天気ばかりではありません。昨今の入札事情も異常です。安倍政権に代わってほぼ2年が経過します。アベノミクス効果は劇的で株価の上昇、円安をもたらしました。消費税増(8%)も加わって物価は明らかに上昇いたしました。当院は新しい宿舎(医師宿舎、看護師宿舎)を建てるべく7月より入札をかけていますが2回とも不落となりました。資材高騰がその原因です。全国的にも不落が続出しています。年末には来年度の消費税を更に2%上げるかどうか決めるそうですが、宿舎の次に予定している外来管理棟の建築も遅れば遅れるほど当初の見積もりを遙かに凌ぐ金額になることを深く危惧いたしております。地政学的にもきな臭い異常な事象、衝突も多くなっています。東シナ海、南シナ海での中国の暗躍、ウクライナ問題、ガザ地区でのハマス対イスラエルの泥沼戦争、イラクでのイスラム国の台頭等々です。第3次世界大戦に発展しなければよいがと思うのは皆さんも同じでしょう。

医療界においてもこの秋に異常とも思える激変がおけると囁かれています。2014年度の診療報酬改訂では急性期病床の絞り込みが図られます。特に7対1でやっている多くの病院は7:1の要件厳格化などの経過措置が終了する9月末を見据えて機能再編の準備を進めています。できることなら7:1に残りたいのが本音でしょうが、10月から始まる病床機能報告制度の絡みもあり、自院の地域での立ち位置を今一度考え直す必要があるようです。

いずれにしても大変な時代に突入したと実感しています。カーブの大躍進が今唯一の楽しみです。広島多くの被災者の皆さんのためにもカーブには頑張って頂き東北震災後の楽天のように、優勝を勝ち取ってほしいと思います。皆様方のご多幸を心よりお祈り申し上げます。(8月寄稿)

理 念

- 一 良質の医療を提供します
- 一 素晴らしい療養環境を提供します
- 一 患者様満足度の向上に努めます
- 一 職員満足度の向上に努めます

柳井医療センターのヘリポート開設について

院長 住元 了

山口県では平成23年度よりドクターヘリの運用を開始いたしました。また平成25年度からは広島県との広域連携が確立されドクターヘリによる患者搬送が増加することが見込まれていました。しかしながら地理的環境や、受け入れ体制等で緊急



離発着場の確保が進まなかった事や、運行件数も予想以上に伸びなかった現状が指摘され運用の見直しが望まれています。そういう背景の中で今回、柳井医療センター敷地内にヘリポートを設置いたしました。開設に至った理由は大きく2つあります。

まず最初の理由は行政からの要望です。現在柳井市の離発着場は中国電力—火力発電所隣の運動場が唯一認められていますが

高压電線が近くを走りヘリコプターの飛行に危険が伴うことから 新たな離発着場の確保が望まれていました。更には当院の敷地は自然災害時に地域住民の避難場所として開放していることから、防災ヘリの離発着場の設置が望まれていたからです。2番目の理由は入院患者並びに地域住民の命を守るためです。柳井医療センターでは脳卒中救急治療を腹部救急治療に加え始めたところであり、今後症例数も増加することが予想されますが、そういう中でより高度な医療を必要とするケースに対しましてはより迅速に高度救命救急センターに緊急搬送する必要があります。その場合敷地内にヘリポートがあれば県内県外を問わずヘリポートを有す大学病院や、近隣のJCHO徳山中央病院、NHO岩国医療センター等に30分以内に緊急搬送が可能だからです。既に当院と同系のNHO岩国医療センター脳外科の間には優先的に患者を搬送することを了解いただいております、当院からヘリコプターで搬送しますと（救急車では1時間以上かかりますが）10分以内に到着することが可能です。救命率も上がることが予想されます。対象患者は当院入院患者（他院での緊急治療を要す）と周辺地域（伊保庄阿月、平生、上関島嶼部）で発生したドクターヘリ要請事案が当面对象となるでしょう。

引き続き、地域医療に貢献をしながら国立病院機構としての使命を果たしていきたいと考えています。



（平成26年9月3日に行った訓練風景）

第15回 European Venous Forum(EVF)参加と Institut Pasteur の施設見学記

独立行政法人 国立病院機構柳井医療センター 小児科 大森 啓 充

2013年6月、第33回日本静脈学会総会（倉敷市）で発表させて頂きました演題「重症心身障害児（者）の下肢DVT とくに慢性期血栓の診断と再発予防—超音波検査とD-ダイマー値の経時的変化から—」に対し、第2回 Integral EVF Travel Award を頂くこととなり、日本静脈学会推薦演題として、2014年6月26日から28日にフランスのパリで開催された第15回 European Venous Forum (EVF) に参加、演題発表、その後、パスツール研究所、Institut Pasteurの施設見学を行い6月30日に帰国致しました。海外での発表は久しぶりでしたので、非常に緊張し不安でしたが、2014年4月に第34回日本静脈学会総会でのドライランでのNicos Labropoulos 教授はじめ学会の理事の諸先生方の貴重な御助言御指導のおかげで、なんとか無事発表することができました。今回の発表で、改めて英語でのプレゼンテーションのやり方を勉強することができひじょうによかったと思っております。

学会場は、パリ市内のエッフェル塔の近くのCap 15 Congress でした。

学会参加者は、全体として600人ぐらいであったと思われます。

学会1日目は、慢性静脈疾患、圧迫療法などのDidactic Sessionがあり、一般演題として深部静脈血栓症などのセッションが続きました。私の発表は、2日目の6月27日の午前にPrize Winning Presentations として、American Venous Forum から2題、American College of Phlebology から1題、そしてJapanese Society of Phlebologyから私の演題と江戸川病院心臓血管外科榊原直樹先生の2題で行われました。

私の拙い英語でほんとうに大変でしたが、発表当日、座長のBo Eklof 教授にはささやかな贈り物（羊羹とお茶）を持っていったのがよかったのか、Eklof 教授のご配慮のおかげで何とか発表を無事終えることができました。帰国後、Eklof 教授に学会での写真などを送らせて頂きましたが、その返信で「Dear Hiromitsu, I congratulate you for an excellent presentation of a unique paper. It was very nice to have the gala dinner together with you, professor Iwai and Tomo. I thank you for the nice present that you gave to me. And for the nice photos! A little wine just makes you hand steady. Looking forward seeing you again. Best regards, Bo」というメールを頂き、少しほっとしました。

学会2日目の夜は、恒例のGala Dinner と題した会員懇親会でした。今回のGala Dinner の会場は、セーヌ川のクルーズでした。この時期のパリの夜は10時過ぎてもまだ明るく、日暮れにつれてセーヌ川から見える周りの景色も刻々と変わっていく、すばらしいものでした。豪華料理、ワインにもとても堪能しました。

それから、施設見学では、私の恩師である理化学研究所 脳化学総合研究センター発生神経生物研究チームリーダー御子柴克彦教授、日本パスツール協会およびパスツール研究所佐藤尚子先生（Unit of Innate Immunology, Institut Pasteur）、酒井大史先生（Stem Cell and development）、中村行宏先生（Dynamic Neuronal Imaging）方のご格別のご配慮によりパスツール研究所（25, rue du Docteur Roux 75015, Paris）の施設見学を岩井武尚日本静脈学会理事長とともにさせて頂きました。研究所へは、学会会場目の前のメトロ6番線「Bir-Hakeim 駅」からNation行きの電車に乗り、「Pasteur 駅」で降りて徒歩約5分ぐらいのところでした。研究所は、広大な敷地に約2000人以上の研究者が世界各国から集まっており（日本からの研究者は現在6名とのことでした）、感染生疾病防止を重点テーマに10の研究部門に130の研究ユニットとラボラトリーで最先端の研究がなされていました。また、フランスの水の大部分は硬水でカルシウムイオンを多く含むため、中村行宏先生の研究室では、実験で使用するためにミネラルウォーター Volvic が大量にストックされていたのが印象的でした。パスツール博物館では、パスツール博士のガラス細工の実験器具、顕微鏡の他、パスツール家ゆかりの美術品なども展示されていました。そのなかで興味深かったのは、ワインとの関わりでした。ルイ・パスツール博士が活躍した19世紀半ば、ワインはフランスの主要な輸出品でしたが、当時の醸造業者はワインの病気（変質）に悩まされていたそうです。

パスツール博士は1863年にナポレオン3世の奨励をうけて、ワインの酸敗が微生物の働きによることを突き止め、摂氏50～60度の熱処理を加えることにより、微生物の発育を防止できることを発見しました。この低温殺菌法（パストゥリゼーション）は、今日ではワインのみならず、ビール・牛乳、その他数多くの食品にも用いられており、全人類がその恩恵に浴しているということです。ほんとうにパスツール博士は偉大であることが改めてわかりました。

私自身、フランスは初めてでしたし、いろいろなことを学べ、いい経験をさせて頂いたすばらしい学会旅行となりました。最後に、このようなすばらしい貴重な機会を与えて頂いた日本静脈学会岩井武尚理事長、Integral EVF Travel Award 選考委員長 福田幾夫先生ほか日本静脈学会の先生方ならびに渡仏にあたり御支援頂いた独立行政法人国立病院機構柳井医療センター住元了院長先生はじめ病院関係者の方々に厚く御礼申し上げます。



Gala Dinner が開催されたセーヌ川のほとりで
(左から岩井武尚理事長、Bo Eklof 教授、筆者)



パスツール研究所にて
(左からパスツール研究所佐藤尚子先生、
筆者、岩井武尚理事長)



パスツール研究所内の
Louis Pasteur 胸像

3階病棟紹介

3階病棟は56床で、神経内科の患者さん（パーキンソン病、脊髄小脳変性症、筋委縮性側索硬化症など）と、血液透析治療の必要な慢性腎不全の患者さんが入院されています。入院患者さんの年齢は35歳から93歳で平均年齢は73歳です。人工呼吸器装着・気管切開の患者さんが多く、ADLの悪化や重篤な合併症に至らない早期発見や予防に努めながら、日常生活の援助を行っています。嚥下機能の低下による誤嚥性肺炎の予防は、医師・栄養士・リハビリ科とチーム医療の連携で嚥下機能評価・口腔ケア・適切な嚥下食の選択・正しいポジショニングで、できるだけ自力で摂取できるよう努めています。



摂食訓練

ストレッチャー用・車椅子用ミストシャワー入浴装置

長期入院患者さんの楽しみは週2回の入浴です。臥床患者さんは、以前よりミストシャワー入浴装置にて入浴気分を味わって頂いていましたが、車椅子で入浴の患者さんへも入浴気分を満足いただけるように、新病棟移転時に車椅子患者さん用のミストシャワー入浴装置を設置しました。浴室には広いスペースが有り、病室からベッドや車椅子で直接移動し入浴ができます。人工呼吸器装着患者さんも医師の監視の元、入浴をすることができます。

「入院してから外に出たことがない。風を感じたい。」と話される患者・家族の思いに対して、院内散歩や、夏祭り・クリスマスコンサート・園芸療法・音楽療法などの院内の行事が企画され、多くの患者さんに安全・安楽に参加して頂けるように、行事委員会メンバーと調整を行い実施しています。また、患者さんが散歩したくなる遊歩道や果樹園の整備を行っています。病室では見られない患者さんの笑顔に、看護のやりがいを感じています。今後も四季を感じて頂ける取り組みを実施していきます。



車椅子の患者さんも参加していただける園芸療法の花壇

果樹園

4 階病棟紹介

当病棟は、外科・透析・神経内科の混合病棟です。

外科は消化器系の手術が主であり、特に痔・ヘルニア・腸切除・人工肛門造設術を行っています。手術を受ける患者さんへ不安なく手術を受けられるようにオリエンテーションを実施し、手術後は、合併症なく退院できるように看護しています。人工肛門造設術後の管理については皮膚トラブルを治癒へと導いた事例がいくつもあります。

また、がんで入院する患者さんは、手術以外に化学療法の治療や疼痛などの症状の緩和を受けています。病室から周防大島や瀬戸内海を一望できる環境の中で患者さんご家族に寄り添った看護を行っています。

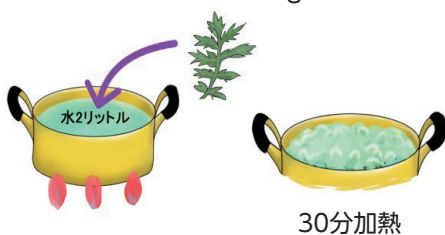
平成24年度から腹部救急の受け入れ病棟としても機能しており、看護師は患者さんが安全安楽に過ごすことができるよう日々研鑽を積んでいます。



また、透析患者さんは、長期入院生活を送っているため、日々の生活を安楽に過ごせるように指導やケアを行っております。透析患者さんの50%が糖尿病を合併しており、末梢循環障害を起こしやすくなっています。そのため、2年前に看護研究を行い、足浴後によもぎローションの塗布を行うことで踵や足の指の血行促進と皮膚の保湿に効果があることがわかり、継続して行っています。古くからよもぎにはシネオールを主成分とする精油を含有し、シネオールの油成分が皮膚の乾燥やあれを防ぐ保湿効果を示すと考えられています。患者さまにも皮膚のカサカサが良くなったと好評です。

よもぎローションの作り方

乾燥ヨモギ 50g



50mlに濃縮



患者様より寄稿
していただきました。

闘病軍師

あっかんべーのコーナー

■「防災センターとお客様」

木谷善夫

消防学校派遣の任期が終了し、校長先生と元の職場復帰に向けてお礼を兼ね同伴しました。校長先生の助言により配属先の希望を叶えて頂きました。派遣中、旧庁舎から新庁舎に移転し、私はまさに浦島太郎状態でした。庁舎内に併設された学習施設、防災センターの担当に決まりました。

防災センターは、団体要予約ですが、開館時間内は出入り自由の施設です。職員の服装は、威圧感のないジャンパースタイルで、気楽に話しかけて頂ける様にとの配慮からです。読者の皆さんは、なぜお客様と言っているのか不思議に思われていることでしょう。実は、庁舎裏には大型バスが複数台駐車可能なスペースがあります。バスが到着したら玄関ロビーにお通し、まずは歓迎のご挨拶、お見送りは、バスが見えなくなるまで手を振る行為、これはまさに「オ・モ・テ・ナ・シ」の心だったのです。

施設の概要は、パソコン16台をLANで接続したバーチャルシアター、地震(横揺れのみ)を再現する振動台、煙体験迷路、救急レッスン室、消火体験、クイズQ&A、防災用品陳列台等です。最初の年は、補助員を1名付けて貰いました。総員4名(日勤1名)+三部制兼務者三名(県内で三部制を実施している消防は、光、岩国、長門の三署)の体制です。指導方法は、マニュアルに沿って行うのですが、細部がよくわかりません。毎日一人ずつやらせてみて整合性をチェックしましたが、どうもしっくりきません。バーチャルシアターでは、TVゲームのようにジョイスティックを操作し、6分以内に火災現場から脱出する模擬体験を味わいます。しかしゲームをやったことのない高齢者は、楽しいはずはありません。阪神淡路大震災のダイジェスト版(7分)DVDを作成し観て頂きました。この作品の中には、南海トラフの津波によるシュミレーションが含まれており、山口県にどの位で到達するか解り易いものでした。地震は、怖い



コンピューターの映像空間で災害時の避難を体験します。災害が発生したショッピングセンターから制限時間内に避難できるでしょうか。

と思わせるだけでなく、避難に十分な時間がある恵まれた県であり、助かる希望を与えてくれる作品と思います。

次は、振動台上の行動です。安全確保の観点からパイプフレームが取り付けられています。

時々TVで東京消防庁の地震体験の様

さまざまな災害体験コーナーがあります

阪神淡路大震災や関東大震災の揺れを体験

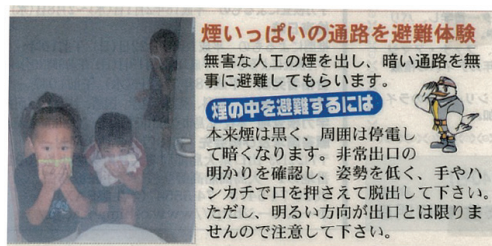
震度3と6強、過去の大地震の揺れを体験できます。

地震が発生したら

大きく揺れる時間は普通30秒～1分程。その間は動かず低い姿勢で座布団などで頭を守る。揺れがおさまったら速やかに屋外へ逃げる。火を使っていたら、落ち着いて消す。

が放映されていました。それによりますと、地震の揺れの最中に火を消すよう指導していたことです。阪神の教訓が、まったく生かされておらず、驚きました。姿勢を低くし、頭部を保護するものが何もないと仮定して、両手で頭部を守る行動をとらせました。揺れが治まってドアを開け避難路を確保するか、関東大震災再現の場合は、昼食前に発生しているので、最後に一口コンロの火を消して訓練終了にしました。幼児には、山大の先生が作詞作曲された「地震だ、だんだん〜ん」の中に出てくるだんご虫のポーズ(できるだけ小さくなって頭部を守る)をしてもらい、揺れは震度2で恐怖心を与えないよう注意して行いました。揺れが治まったら顔を上げて記念撮影!

煙体験迷路では、3つのドアの1つのみ開錠しておいて、そこまでたどり着いたら脱出成功と言うものです。私は、熱いドアを再現させたかったのですが、予算上無理で熱いドアの取っ手(事前にホッカイロを巻いて貼っておく)になってしまいました。



子供には「触って熱ければ、そのドアの向うは火事なので、絶対開けてはいけません。今日は、ドアの取っ手が熱くなる様、特別な仕掛けがしてある」と説明して送り出します。中は、真っ白な無害の煙が充満させてありますので、低姿勢でも前は見えません。当たりのドアに到達できなかった子供は悔しがります。全員脱出した頃、換気扇のスイッチを入れ煙を抜き、本当の煙の話をして。色は黒、停電して暗闇、濡らしたタオルを口にあて有毒ガスを吸わない、誘導灯がぶら下がっているの確認を。説明後、もう一度中に入らせ納得させます、今度は背を低くしないでいいからと。

メンテナンス業者に熱いドアのことを尋ねると、いいアイデアと思うが実際そのような物件を見たこともないし採用している消防さんはないように思いますとの回答。トップもたまに見に来る事はあったが熱いドアには理解は得られなかった。



平成26年4月2日～平成26年8月31日 採用者

採用			
日付	区分	職名	氏名
H26.07.01	採用	薬剤師	村重 智子
H26.07.01	採用	看護師	藤岡 由里
H26.08.01	採用	神経内科医師	神原 智美

外来診療担当表

平成26年10月1日現在

 国立病院機構柳井医療センター

		月	火	水	木	金	備考
内科(消化器・一般)		—	松本 信夫	—	松本 信夫	松本 信夫	
神経内科	初診	宮地 隆史	神原 智美	竹田 育子	山崎 雅美	福場 浩正	
	再診	竹田 育子	竹田 育子	宮地 隆史	宮地 隆史	—	
	再診	福場 浩正	福場 浩正	上利美智子	神原 智美	山崎 雅美	
外科	初診	住元 了	竹本 将彦	住元 了	池田 政宣	佐田 春樹	火・木曜日 午後手術日
	再診	池田 政宣	佐田 春樹	田村 泰三	田村 泰三	安澤 紀夫	
	再診	—	—	安澤 紀夫	竹本 将彦	—	
整形外科		—	—	—	槇坪真奈美 (広大医師)	—	
循環器内科		—	—	小田 望 (広大医師)	—	—	
内科(肝・胆・膵・消化器)		福原 崇之 (広大医師)	—	—	—	—	
内科(糖尿病・内分泌)		—	—	—	—	大久保博史 (広大医師)	
内科(腎臓)		—	—	—	—	吉田 健 (広大医師)	
内科(内視鏡)		松本 信夫 福原 崇之	—	松本 信夫 第4週 栗原 美緒	第1・3週 中村 松美	—	
皮膚科		—	第1・3週 鼻岡 佳子 第2・4週 入福 令子 (広大医師)	—	—	—	
泌尿器科		広大医師	—	—	—	—	午後のみ

※発達療育相談外来(随時 受診には事前予約が必要です)

〒742-1352 山口県柳井市伊保庄95 独立行政法人国立病院機構柳井医療センター

電話 0820-27-0211 (代表)

FAX 0820-27-1490 (連携室)

メール renkei@yanai.hosp.go.jp

HP <http://yanai-hosp.jp/>

外来受付時間

8時30分～12時00分

出張・休暇等の理由により、担当が変更となる場合がありますのでご了承ください。